

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 八戸市方言の疑問文とその文末音調に関する調査報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00003273">https://doi.org/10.15084/00003273</a>

# 八戸市方言の疑問文とその文末音調に関する調査報告

菅沼 健太郎<sup>19</sup>

岩崎 真梨子<sup>20</sup>

## 1. はじめに

本報告書は、今回の調査により得られたデータをもとに、青森県八戸市方言の疑問文の形式と文末音調（以下単に音調と呼ぶ）について報告するものである。

本報告書では、まず yes/no 疑問文の形式と音調、次に wh 疑問文（疑問詞疑問文）の形式と音調について述べる。さらに、これらとは分ける形で、確認型疑問文等に現れる文末形式 /be/ の用法および音調について述べる。

なお、今回行った調査、およびその後の追加調査に協力していただいた方々の情報を以下に示す（氏名は公表しないこととする）。この場を借りて同氏たちに感謝申し上げる。

1. A 氏 1948年八戸市生まれ、男性。

B 氏 1948年八戸市生まれ、男性。

C 氏 1962年八戸市生まれ、男性。

3名は全員言語形成期を青森県八戸市で過ごした方々である。

以降に挙げる例文などのデータは主に A 氏から得たものであるが、場合によっては B 氏、C 氏から得たものを挙げることもある。その場合には例文横に【B 氏】、【C 氏】のように話者を表示する（表示がないものは A 氏からのデータである）。

## 2. yes/no 疑問文

### 2.1. 形式

本調査では yes/no 疑問文を形成する文末形式として /do/ と /ka/ の2種類が観察さ

---

<sup>19</sup> すがぬま けんたろう：金沢大学・助教 suganumak@staff.kanazawa-u.ac.jp

<sup>20</sup> いわさき まりこ：八戸工業大学・講師 iwasaki@hi-tech.ac.jp

れた<sup>21</sup>。これらは母音に後続する際、それぞれ、/d/ の前鼻音化、/k/ の有声化が起き [ndo]、[ga] のような発音になる。これらを述語に承接することで yes/no 疑問文が形成される。また、観察した限りでは /ka/ は準体助詞 /no/ “の” に承接し /no=ka/ [noga] という形で多く用いられていた。/ka/ と /no=ka/ は東京方言の /ka/ “か” および /no=ka/ “のか” と同じものとみてよいだろう。ただし、東京方言の /no=ka/ と異なり、八戸市方言の /no=ka/ は (2c) に示すようにコピュラの /da/ に /da=no=ka/ のようにそのまま承接できる。東京方言の場合、/da=no=ka/ とならず、/na=no=ka/ という形式になる（例：<sup>ok</sup>君の親父は医者なのか？、\*君の親父は医者だのか？）。

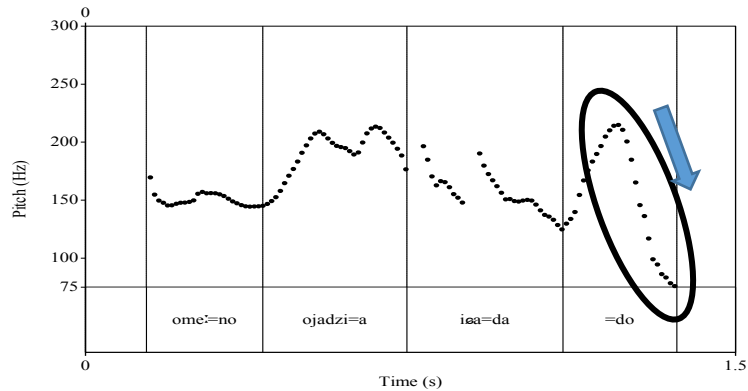
2. a. /do/ omee=no ojazi=a isja=da=do  
お前=の 親父=は 医者=だ=ど  
“お前の親父は医者なの？”
- b. /ka/ dare=ka nom-u =ka  
誰=か 飲む-非過去=か  
“誰か飲むか？”
- c. /no=ka/ omee=no ojazi=a isja=da=no=ka  
お前=の 親父=は 医者=だ=の=か  
“お前の親父は医者なの？”

## 2.2. yes/no 疑問文における音調

木部 (2010) は、八戸市方言の質問文（本報告書で言う yes/no 疑問文と wh 疑問文）の文末音調は下降調で実現するという。実際、我々のデータでも、/do/ による yes/no 疑問文では図 1 に示すような急激な下降が観察された。

---

<sup>21</sup> A 氏によれば /do/ は目上の者にはあまり用いないという。

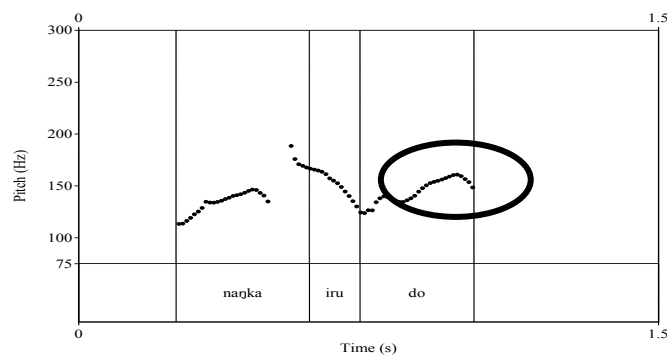


omee=no ojazi=a isja=dado

“お前の親父は医者なの？”= (2a)

図 1 /do/ による yes/no 疑問文のピッチ曲線

また、此島（1982）は、同方言には疑問の /do/ に加え、強示の意味をもつ終助詞 /do/ というものもあり、文末の /do/ が疑問を表すか、強示を表すかは音調（此島 1982 はアクセントという）によって区別されるとしている<sup>22</sup>。我々が得たデータの中にもこの記述に合致するものがあつた。以下の図 2 は強示の /do/ であるが、こちらでは疑問の /do/ のような、急激な下降は観察されなかつた。



naN=ka i-rudo

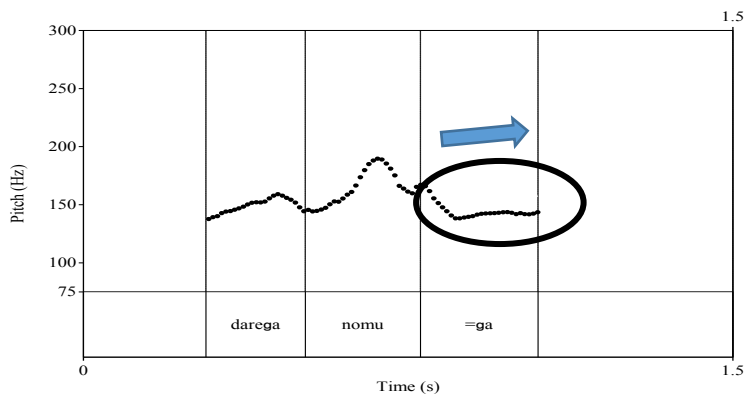
何=か いる-非過去=ど

“何かいるぞ。”

図 2 強示の /do/ を用いた平叙文のピッチ曲線

<sup>22</sup> なお、此島（1982）では疑問の /do/ の場合、行クド、来タドのように述語（動詞）によって音調が異なると書かれているが、今回の調査ではこの点についての確認は行えなかつた。

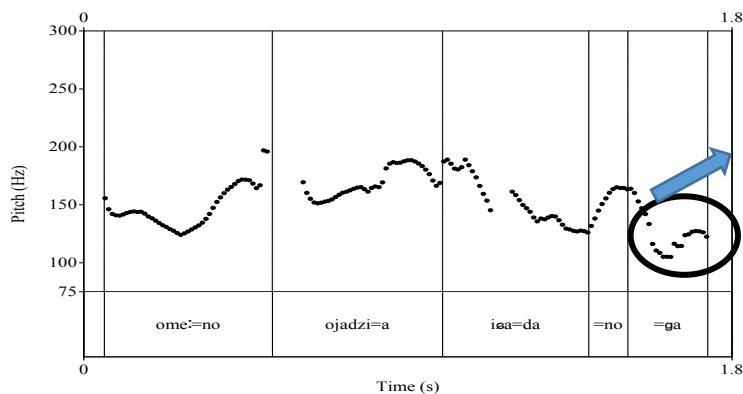
図 1 で示したように yes/no 疑問文の /do/ は下降調で実現する。しかし、一方の /(no)=ka/ では /do/ と異なり緩やかな上昇調が観察された。



dare=ka nom-u=ka

“誰か飲むか？” = (2b)

図 3 /=ka/ による yes/no 疑問文のピッチ曲線



omee=no ojazi=a isja=da=no=ka

“お前の親父は医者なの？” = (2c)

図 4 /no=ka/ による yes/no 疑問文のピッチ曲線

次節では wh 疑問文について述べる。

### 3. wh 疑問文

#### 3.1. wh 疑問詞

疑問詞として以下の(3)が観察された。[idzi]/itu/“いつ”等の、音声レベルでは異なるが、音素レベルでは東京方言と同じ形式だと考えられるものを除くと、形式が東京方言と異なるのは、(3c)“どんな”、(3h)“いくら、いくつ”、(3i)“なぜ”の3つであった。

3.	a. [dare]	/dare/	“誰”
	b. [nani]	/nani/	“何”
	c. [dottara]	/doQtara/	“どんな”
	d. [dono]	/dono/	“どの”
	e. [dore]	/dore/	“どれ”
	f. [dottsɪ]	/doQti/	“どっち”
	g. [dogo]	/doko/	“どこ” <sup>23</sup>
	h. [nambo]	/naNbo/	“いくら、いくつ（量・値段・数全てに用いる）”
	i. [naɯciɲi]	/naNsini/	“なぜ”
	j. [idzi]	/itu/	“いつ”
	k. [do:]	/doo/	“どう”
	l. [do:jatte]	/doojaQte/	“どうやって”

また、/dare/“誰”については単複の区別があり、複数形の場合は /deNdo/ という形式が用いられる。

4.	a. /dare/	“誰（単数）”
	b. /deNdo/	“誰（複数）”

A氏から、/deNdo/の/do/は複数形を意味するとのコメントがあった（例 /warasi-do/“子供たち”）<sup>24</sup>。すなわち形態素境界が /deN-do/ のように /deN/ と /do/ の間にあり、/dare/には /deN/ という異形態があることになる。この /deN/ は他にも

<sup>23</sup> /doko/は与格助詞 /sa/が承接した場合、/dokosa/という形式だけでなく、/dosa/という形式にもなる。

<sup>24</sup> ただし複数と言っても、C氏との調査によれば、この /do/は無生物には用いることはできないとのことだった（例 \*/hoN-do/“複数の本”【C氏】）。

/deN=da=Qkja/ “誰だ?”のようにコピュラの /da/ の前にも現れた。/da/ や /do/ といった歯茎音を初頭にもつ形態素が承接することが /deN/ の出現条件になっている可能性がある。

### 3.2. wh 疑問文における文末形式

A 氏との調査では wh 疑問文の文末形式として /no=jo/ と /Qkja/ の 2 形式が現れた。さらに、C 氏との追加調査によれば、yes/no 疑問文で現れた /do/, /no=ka/ も wh 疑問文で用いられるという。まとめると、wh 疑問文では以下の 4 形式が文末に現れたことになる。

#### 5. wh 疑問文における文末形式

- a. /no=jo/
- b. /Qkja/
- c. /do/
- d. /no=ka/

/no=jo/ は音声上は [noe] と実現しうる。また、/Qkja/ はノダ /no=da/ の縮約形ンダ /N=da/ に承接した /N=da=Qkja/ という形で多く用いられた。以下に 4 形式が用いられている例を示す。

#### 6. /no=jo/ が用いられている例

naNsini ano ie=ba kaQ-ta=no=jo  
なぜ あの 家=を 買う-過去=の=よ  
“どうしてあの家を買ったの?”

#### 7. /Qkja/ および /N=da=Qkja/ が用いられている例

##### a. /Qkja/

omee doo omo-u =Qkja  
お前 どう 思う-非過去=っきゃ  
“お前は どう思う?”

##### b. /N=da=Qkja/

dare kuru=N=da=Qkja  
誰 来る=の=だ=っきゃ

“誰が来るの？”

8. /do/ 【C氏】

dare oQkane=do

誰 恐ろしい=ど

“誰が恐ろしいの？”

9. /no=ka/ 【C氏】

dare oQkane=no=ka

誰 恐ろしい=の=か

“誰が恐ろしいの？”

/no=jo/ の /no/ について、東京方言であれば、“どうして買ったの？”などように /no/ だけで疑問を表すことができるが、今回得たデータではそのような /no/ で終わるデータは得られなかった。また、/Qkja/ について、これは wh 疑問文だけではなく、以下に示すように平叙文や yes/no 疑問文にも現れうる。ただし、yes/no 疑問文の場合は「お酒を飲むんだったっけ？」のような確認の意味を含む疑問文になる。

10. /Qkja/ を用いた平叙文

sunā komaQkoi=Qkja

砂 細かい=つきゃ

“砂が細かい。”

11. /Qkja/ を用いた yes/no 疑問文 (=確認の疑問文)

sake nom-u =N=daQta=Qkja

酒 飲む-非過去=の=だった=つきゃ

“お酒を飲むんだったっけ？”【C氏】

ここで、各文末形式の出現環境を平叙文と yes/no 疑問文も考慮に入れてまとめると、以下のようなになる。

表 1 各文末形式の出現環境

文末形式	/no=jo/	/Qkja/	/do/	/no=ka/
------	---------	--------	------	---------



文タイプ				
平叙文	未調査	✓	*	*
yes/no 疑問文	*	✓ (確認の疑問文となる。)	✓	✓
wh 疑問文	✓	✓	✓	✓

このうち、最も広い分布をもつのは /Qkja/ である。吉田 (2008) では青森県津軽方言の文末形式の /Qkja/ の用法について論じている。その中で吉田 (2008) は、(12) に示す /Qkja/ の使用条件を挙げ、さらに /Qkja/ の用法として (13) の同意要求用法と、(14) の想起要求用法というものを挙げている<sup>25</sup>。

## 12. 津軽方言の /Qkja/ の使用条件

発話時に話し手と聞き手に共通の経験・認識がある事態を述べる文に用いられる。

## 13. 同意要求用法：現在時の話し手の認識について、聞き手に対し認識を共有していることの確認を求める。

例：インフルエンザノ注射ッテイデッキャ [吉田 (2008), p. 4 (16)]

## 14. 想起要求用法：話し手と聞き手との共通認識の事態を聞き手に思い出し、認識してほしいという話し手の思い（要求）を伝える。

例：昨日野球ヤッタッキャ。ソレデ体がダルインダ [吉田 (2008), p. 2 (5)]

(13)、(14) ではそれぞれ、「インフルエンザの注射を聞き手も経験していること」、「昨日野球をしたことを聞き手も知っていること」が前提となっている。各例文における用法も考慮し、訳を付すならば、(13) は“インフルエンザの注射は痛い（君も注射を経験したことがあるから、そう思うだろう？）”、(14) は“君も知っていると思うが私は昨日野球をした。そのため、体がだるい”、ということになる<sup>26</sup>。

これらの用法を考慮に入れつつ、八戸市方言の /Qkja/ の説明を試みると、(10) の平叙文における /Qkja/ は「砂が細かい」という認識を聞き手に同意してほしいという (13)

<sup>25</sup> 吉田 (2008) では /Qkja/ ではなくカナ標記の「キャ」としているが、挙げられている例文では「ッキャ」となっているため、本報告書では八戸市方言の /Qkja/ と同じ表記にした。また、吉田 (2008) では文末表現としての /Qkja/ の用法として、同意要求用法、想起要求用法の他に、同意表明、回想、感嘆、伝聞の用法があるとしている。

<sup>26</sup> 吉田 (2008) では各例文に具体的な共通語訳は振られていない。

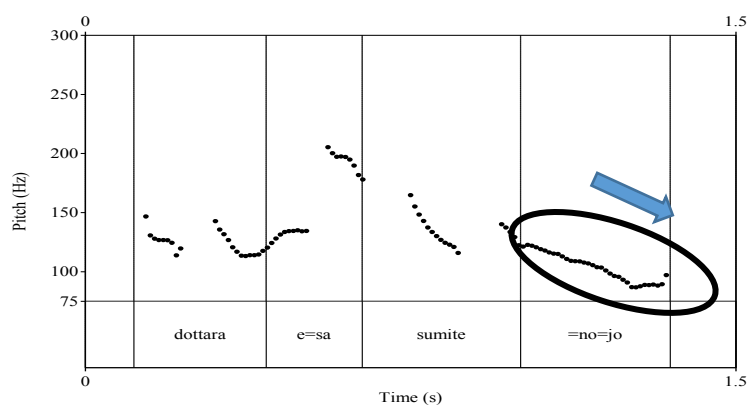
の同意要求用法、(11) の yes/no 疑問文における /Qkja/ は酒を飲むかどうか思い出してほしいという (14) の想起要求用法だと考えることができる。ただし、吉田 (2008) の分析がそのまま八戸市方言にも当てはまるかは今後検討する必要がある。特に、吉田 (2008) では津軽方言の /Qkja/ が疑問文で使用可能であるかは述べられていないため、(11) の yes/no 疑問文の /Qkja/ が本当に吉田 (2008) の言う想起要求に完全に合致するかは不明である。加えて、(7) に示した wh 疑問文における /Qkja/ は話し手が知らないことを聞き手に尋ねている。つまり共通の認識がない場面での発話であるため、(12) の条件に反している。津軽方言と八戸市方言の異同も視野に入れつつ、今後 /Qkja/ の用法について明らかにする必要があるだろう。

### 3.3. wh 疑問文における音調

wh 疑問文で現れた 4 形式の文末音調は以下ようになった。

15. a. /no=jo/ : 下降
- b. /Qkja/ : 下降
- c. /do/ : 下降
- d. /no=ka/ : 上昇

wh 疑問文で新たに現れた /no=jo/ と /Qkja/ は下降調で実現した。また、yes/no 疑問文でも現れた /do/、/no=ka/ は yes/no 疑問文同様に wh 疑問文でもそれぞれ下降調、上昇調で実現した。以下に、/no=jo/ と /Qkja/ が現れている文のピッチ曲線を示す。

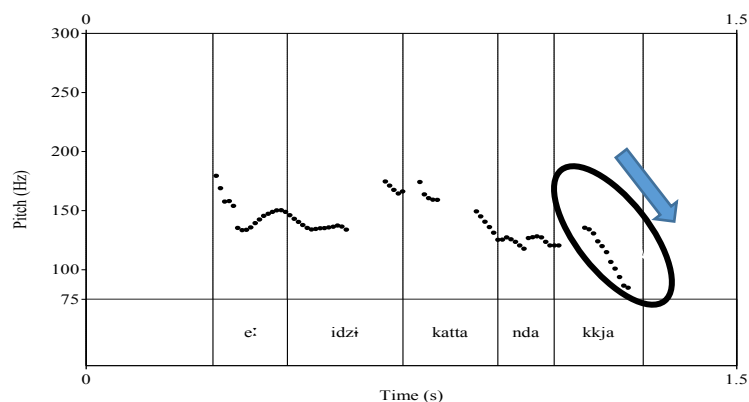


doQtara e=sa sumite =no=jo

どんな 家=に 住みたい=の=よ

“どういう家に住みたいの？”

図 5 /no=jo/ が用いられている文のピッチ曲線



e: itu kaQ-ta =N=da =Qkja

家 いつ 買う-過去=の=だ=っきゃ

“家をいつ買ったの？”

図 6 /Qkja/ が用いられている文のピッチ曲線

#### 4. 文末形式 /be/

##### 4.1. /be/ の意味機能

yes/no 疑問文、wh 疑問文の区別に関わらず、自問文および修辞疑問文においては、/be=ka/ という形式が文末に現れた。

##### 16. a. yes/no 型自問文

arjaa umi=sa de-ru =be=ka

あれ(あいつ)は 海=に 出る-非過去=べ =か

“あいつは海に出るだろうか。”

##### b. wh 型自問文

nani nom-u =be=ka

何 飲む-非過去=べ=か

“（あの人は）何を飲むだろうか。”

17. a. yes/no 型修辭疑問文 【B氏】

koQtara uma-ku=ne sake nom-u =be=ka

こんな うま-く=ない 酒 飲む-非過去=べ =か

“（酒にうるさいあの人が）こんなおいしくない酒を飲むだろうか。”

b. wh 型修辭疑問文 【B氏】

darjaa koQtara uma-ku=ne sake nom-u=be=ka

だれが こんな うま-く=ない 酒 飲む-非過去=べ =か

“誰がこんなおいしくない酒を飲むだろうか。”

また、/be/ という形式は確認型疑問文（～だろうか？、～でしょう？など）においても観察された。

18. 確認型疑問文

omee=no ojazi=a maibaN sake nom-ane=be

お前=の 親父=は 毎晩 酒 飲む-否定=べ

“君のお父さんは毎晩お酒飲まないでしょう？”

さらに、この /be/ について此島（1982）では、推量を表すと述べており、今回のデータでもそのような例を得ることができた。

19. 推量の /be/

ame-Qko huQ-te mizutamari deki-ru =be

雨-指小辞 降る-中止 水たまり できる-非過去=べ

“雨が降って水たまりができるだろう。”

推量として用いられる点、修辭疑問文の「～だろうか」に相当する部分に /be=ka/ のように用いられている点、確認にも用いられることを踏まえると、この /be/ は東京方言の推量のダロウに相当する形式であるといえる。ただし、この /be/ はダロウよりも用法が広く、“～しよう”という意向を表すこともできる。

20. koQtja kite sake nom-u =be

こっちに 来て 酒 飲む-非過去=べ  
 “こっちに来て酒を飲もう。”

また、/be/ は丁寧な命令においても用いられた。「お飲みください」という丁寧な命令を調査した際、A氏は以下の(21)のように「飲んでくれないだろうか」とした。

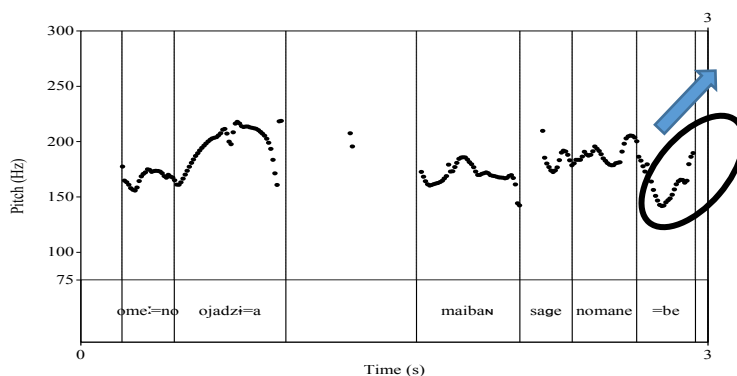
21. 調査文「どうぞお飲みください」に対して

noN-de ke-ne =be=ka  
 飲む-中止 くれる-否定=べ=か  
 “飲んでくれないだろうか。”

これは /be=ka/ を用いてあえて自問の形にし、相手に直接の返答を要求していないことを示すことで丁寧さを表現しているのだと考えられる。東京方言でもダロウの丁寧形デショウを用いて、「飲んでいただけないでしょうか」と表現するのと同じものであろう。

4.2. /be/ の文末音調

/be/ は確認型疑問文では東京方言のダロウ同様上昇調になった<sup>27</sup>。



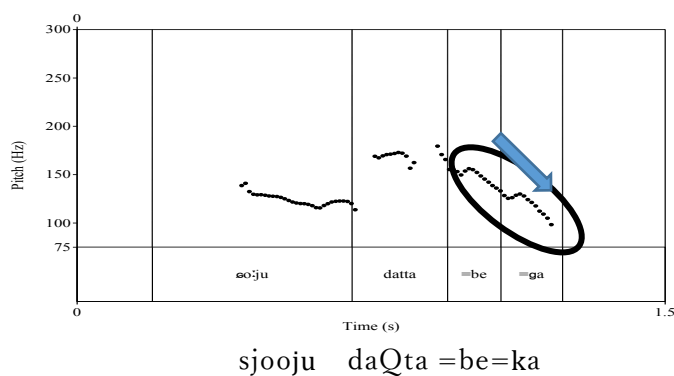
omee=no ojazi=a maibaN sake nom-ane=be

“君のお父さんは毎晩お酒飲まないでしょうか？”=(18)

図 7 確認型疑問文のピッチ曲線

<sup>27</sup> ダロウの音調については日本語記述文法研究会 (2008, p.39, p. 149)、森山 (1992) を参照した。また、これらの先行研究ではダロウには急激な下降を伴うことで、自身の考えを押し付ける用法もあるという(例: 何度も言っているだろっ!)。/be/ にもこのような用法があるかは未調査である。

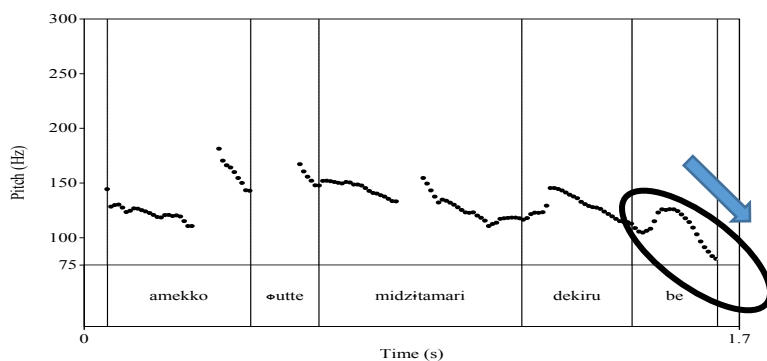
また、自問文、修辞疑問文では /be=ka/ 全体、或いは /ka/ の部分が下降調となった<sup>28</sup>。さらに、推量文でも /be/ は下降調となった。以下に自問文と推量文のピッチ曲線を示す。



醤油 だった=べ=か

“（料理の手順を忘れて、最初に入れる調味料を思い出して）醤油だっただろうか？”

図 8 自問文のピッチ曲線



ame-Qko huQ-te mizutamari deki-ru=be

“雨が降って水たまりができるだろう。”= (19)

図 9 推量文のピッチ曲線

<sup>28</sup> 図 8 は A 氏の発話であるが、これでは /be=ka/ 全体が下降となっている。一方、B 氏の修辞疑問文の発話では /be=ka/ の /be/ で上昇し、/ka/ で下がるピッチ曲線が得られた。話者間でこのような差異はあるものの、/ka/ の部分が下降で実現する点は話者間で共通している。

## 5. まとめと今後の課題

本報告書では八戸市方言の疑問文の形式と音調について報告した。特に文末形式と音調の調査結果を表にしてまとめると、以下のようになる。

表 2 文末形式と音調の調査結果

疑問文のタイプ	文末形式	音調
yes/no 疑問文	/do/	下降
および wh 疑問文	/(no=)ka/	上昇
wh 疑問文	/Qkja/	下降
	/no=jo/	下降
自問・修辞疑問文	/be=ka/	下降
確認型疑問文	/be/	上昇

2.2. 節で述べたように、木部（2010）では八戸市方言の質問文の文末音調が下降調で実現することがすでに述べられている。これについては今回の調査でもおおむね同じ結果が得られた。しかし、今回の調査により、同方言では / (no=)ka/ が用いられること、そしてそれが上昇調を伴うことが明らかになった<sup>29</sup>。

今後の課題としては 3.2. 節で述べた津軽方言との異同のような、他方言との対照が挙げられる。例えば、東京方言などでは“太郎は来る。”に対する“太郎は来る？”のように、疑問詞や疑問の文末形式なしに、上昇調のみで疑問を表すことが可能である。このような音調のみによる疑問表示が八戸市方言においても可能であるかが明らかではない。また、木部（2010）が述べるように、東京方言では yes/no 疑問文、wh 疑問文ともに文末は上昇調で実現する。その一方で八戸市方言は表 2 を見る限り下降調が主である。しかし、確認型疑問文では東京方言のダロウ同様上昇調が確認された。他にどのような文タイプで音調に関して方言間の異同がみられるのか今後明らかにしていきたいと考えている<sup>30</sup>

<sup>29</sup> / (no=)ka/ という形式は、“お前の親父は（本当に）医者なのか？”のように、やや強い疑いのモダリティをもつものの、上昇調を伴う形で東京方言でも用いられるため、これは東京方言（を基盤とした共通語）の影響により成立した可能性がある。

<sup>30</sup> 命令形においても顕著な下降調が現れたことをここで述べておく。このような下降調は東京

## 参考文献

- 木部暢子 (2010) 「イントネーションの地域差—質問文のイントネーション—」 小林隆・篠崎晃一 (編) 『方言の発見—知られざる地域差を見る』 1-20. 東京：ひつじ書房.
- 此島正年 (1982) 「青森県の方言」 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一 (編) 『講座方言学4—北海道・東北地方の方言—』 213-236. 東京：国書刊行会.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2008) 『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』 東京：くろしお出版.
- 森山卓郎 (1992) 「推量をめぐって」 『言語研究』 101: 64-83.
- 吉田雅昭 (2008) 「青森県津軽方言地域における文末・接続表現『キャ』の用法」 『文芸研究』 167: 1-14.

---

方言ではみられない。

Nga tjaQtjato nom-e: ↘

お前 さっさと 飲む-命令

“お前、さっさと飲め！”